

夏目漱石

愛読せる

外国の小説戯曲

愛読せる外国の小説戯曲

僕はたいてい一度読みっ放しにするだけで、二度と繰り返すことはほとんどないくらいだから、何を愛読するかと聞かれるとちよつと困る。人についていうにしても、この人ではどこがよい、あの人ではこういうところが旨うまいとといったふうで、誰が好きだともいい難いがた。同じように思ってる人を挙げたり挙げなかったりすると不公平になる。

もちろん愛読するといえは近代のもので、いつか僕が

十八世紀文学の講義をしたので、アジソンなどが好きだと言ってる人もあるようだが、アジソンなどはただ当時のマナーを時代違いの現代から髣髴して、隔世の覗き眼鏡めがねを呑気に眺められるところに興味が多いので、靴の紐の結び方がどうだとか帽子がばかに高いとかいうようなところが僕には面白いばかりである。寝転んで閑ひまつぶしに読むには気楽でいい。しかし汗牛充棟の書物のうちからとくにこれを抽ぬき出してこれが愛読書物とは、もちろんいうつもりはない。

イブセンですか。イブセンは豪えらい。さあどこが豪えらいか

明瞭にお話をするには読み尽したうえで考を纏めてかか
らなければならぬ。しかしマーテルリンクの戯曲論の
うちにこんな意味の事がかいてあります。——いろいろ
な事情（内界外界）のために現今の戯曲というものは詩
趣的装飾を失った。この欠陥を補うために戯曲家はやむ
をえず人間の意識の奥へ奥へと割り込んで、その方面で
償つぐないをとらなければならぬ。意識の奥へはいるために
は霊明な意識を捕えてこなければならぬ。ぼんやりし
た、分わからず屋の真暗な意識では十歩割り込んで百歩割
り込んで依然として暗いばかりで要領を得ない。イブ

センの劇はこの点において意識の最高点に達したものである。劇はもとより動作が主である。いかに意識の内部へはいり込んでも、これが動作に変化しなければ劇にならない。ところで意識が動作に変化する状態を観察してみると願望と義務の衝突に帰着してしまう。換言すれば情熱と徳義との喧嘩にすぎない。したがって現代の戯曲家は好んで道德問題を捕えてくる。いな彼らはことごとく甲もしくは乙の道德問題を研究しているといっても差さし支つかえない。この種の劇はデユマに始つて現代の仏国の劇場の三分の二は、やはりこの種の劇を演じている。他国

の劇はもとよりフランスの反響にすぎぬゆえ、もちろんのことである。しかしこの種の劇において吾人の注意すべき事實はどれもこれも道德問題を取扱うにもかかわらずその道德の解釈が最初から観客に分り切っていることである。世間の約束でちゃんと杓子定規に極まっているものばかりである。女が貞操を汚しても許して差支なからうかとか、相愛の結婚のほうが金銭の結婚よりも望まじきものであるうかとか、親といえども子の恋を圧服することができるだらうかとかというような明々白白々毫も世間の習慣から見て解釈に苦しまない問題のみである。

だから劇中のいわゆる義務は平凡なる常人の意識内に起る義務である。劇中のいわゆる願望もまた平凡なる常人の意識内に起る願望である。したがって意識の奥へ進みたくても、底まで行きたくても、どうすることもできないのである。そこをハウプトマンやビョルンソンや（ことに）イブセンは、かまわず切り込んで先へ進んだのである。しかし先へ進むためには俗以上に明らかな意識を具えている人物を作らなければならない。ぼんやりしたどころんけんな意識の所有者ではいかに身分が高くても、幅利きでも、評判のいい男でも、尊敬される金持でも世間

に通用するだけで舞台には通用しない。意識の最高度をあらわす劇には無用の長物である。古代劇の詩趣的装飾を失った埋合せをする劇の主人公としては三文の価値もない。だからイブセンなどはそれを避けて意識のもつとも明かに進んだ人物を描いたのである。しかしながら理論的に考えてみると真個開明の極致に達した意識というものには普通のものよりもはるかに平穩で、忍耐に富んで、抽象的で、概括的でなければならぬ。また義務のほうからいっても、そのとおりである。普通の昏昧こんまいな意識中にある義務は時としてはびゆうけん謬見である。偏解である。虚

偽である。約束である。かの俗界にいうところの名誉なり、復讐なり、自重なり、虚栄なり、信心なり、ことごとく流俗のみとめて争うべからざる義務の根源と心得るもので、ことごとく義務とするに足らぬものである。己靈の光輝に遍照の利益を享^うけたる超凡の人より見れば、まさしく義務とするに足らぬ義務である。にもかかわらず普通の劇なるものは、この義務とするに足らぬ義務を中心として成立しているのである。そこで再びイブセンに立ち帰って考えてみると彼はその劇において吾人を人間意識の甚^{じんしん}深の急所まで連れ込んでゆく男である。ただ

劇には一道の怪炎があつて、終始吾人をつけ纏っている。したがつてイブセンの劇においても吾人が彼とともに最高なる人間の意識を承当するとともに、かれの悲劇の運命を支配する義務が、この高邁英霊なる意識の内部より起らずしてかえつて外方そとに存するがためにややともすると不適度なる自覚もしくは暗澹あんたんたる風狂と化しおわ了るのを悲しむのである。——マーテルリンクの説はたいへん面白い。イブセンの書いた人間が一拍子變つているのはまったくこれがためで、ドンキホテやピクウィックに出てくる人間が一拍子變つているのは主意が違うのである

る。またレミゼラブルの主人公が群を離れて変っているのとも、おのずからその主意が違うのである。つまり普通以上の自覚のある人間を描き出して、その自覚を動作にあらわそうというのが彼の目的なのである。したがって彼の道德問題に関する解決は常人の解決と違ってくる。途方もない解釈をする。イブセンはこの方法で吾人に約束的な解決以上に道德問題の解釈の方法があるという教訓を与えると同時に、この約束的以上の解釈で現代の劇に不足している詩趣的装飾を償ったのである。その代り彼のかいた人間はちよつと面喰うめんくらような無鉄砲もの

が多い。考えると馬鹿気た気狂染みた人間が雑作なく平気で出てくる。ほとんど応接に違いごとまなきくらい出頭没頭するから驚ろいてしまう。それが普通の身分のものである。三度の飯はそれ相応に食っている。活発かつぱつはつち澆地に働いている。にくらしいほど健全である。隣りの八さんや向うの熊さんと同じ人間である。ただどこか一方が底が抜けている。この底そこぬけ抜趣味のために一編の劇が成立する。それが彼の慣用手段である。早い話がヘツダ・ガブラなんて女は日本に、とうていいいやしない。日本は愚かおろ、イブセンの生れた所にだっている気づかいはない。それだ

からイブセン劇になるのである。ただこんな底抜をつらまえてきてさも生きていようように、隣りに住んでいるように、自分と交際しているようにかくのがイブセンの芸術家たるところ、一大巨匠たる所以である。芸術家といえはイブセンの劇の構造についても言いたくなるが、あまり長くなるから、ただ気のついた二三か条のうち一つを御参考に話すが、イブセンの劇のあるものを見ると、まさに展開し、また展開せざるべからずとの予期を讀者に与えながら、その事件がそれぎりお流れになってしまふことがある。たとえばマスター・ビルダーの内の序幕

に出てくる女の書記と大工との関係は、どうしても、これから先があるなと読者から発展を待ち設けられても一言もないかき方だ（他の理由も認められるけれども）。ところが中途から一種奇妙不思議な女が飛び出してきて、大工と女書記との関係は仕舞まで、ちっとも動いていない。序幕を忘れていればそれまでだが暗に期待しつつ読んでゆくとなんだか物足らない。蒔いた種がいつまでたっても芽の出ないような気がする。このほかにも例を挙げればまだあるが、こんなところは外の人には気にかからないかもしれぬ。ただ余にはどうもなんだか

難^{ありがた}有くない。もつとも近來はハウプトマンの織子などといつて、まるで個人としての主人公の存在しない劇が出てくるくらいだから、このくらいなことはなんでもないかもしれない。シエクスピヤの構造も研究したらいろいろ非難が出るだろうが、結末が纏まっつていふという点は慥^{たしか}である。その代りなんだか不自然に纏めた感じが起らないともいえない。批評家の研究に価する問題だろうと思うが、長くなるからこのくらいにしておこう。

英国のものですか。ピネロだの、ジョーンズだの、シヨーなどのものを少し読んでみたが、セコンド・ミセス

・タンカレーがいちばん面白かったように記憶している。……近ごろ面白く感じたのはズーデルマンのアンダイング・パストで、あの中のフェリシタスという女の性格と、その叙方にはひどく感心した。あんな性格が生涯に一度でも書けたらよかろうと思う。

(文責在記者)

(明治四一・一・一「趣味」)

日本文学電子図書館

愛読せる外国の小説戯曲

著 者 夏目漱石

制作者 宮澤一郎

底 本 「漱石全集 第6巻」角川書店
昭和42年7月30日5版発行

日本文学電子図書館